

リレー連載生ヒストリー温故知新

第 28 回 近藤正昭さん (69 期)

コロナ禍 3 年間の改革

社会生活に多大な影響を与えたコロナ禍は同窓会の運営でも同様で、その 3 年間に回顧する。

「えっ、誰もいない」2020 年 3 月 次期会長候補として実態を理解するため、幹部会に出席を求められ日本橋の事務所訪問した。折からのコロナ禍で急遽幹部会は中止となっていたが、その連絡をもらえなかった。この経験は情報の確実な伝達・共有として教訓となった。ひとり飲みした店はのちの行きつけの店となる。

6 月の総会は史上初めて一堂に会することなく“紙上”総会となり、就任後、新役員・執行部としてソロっとスタートした。最初の大きな行事は“新年会”。会報で従来の開催案内を編集して、いざ送付しようとしたところ、感染者が急増。急遽幹部間で相談し、発送 3 日前に懇親会のみ中止することにし、会報に中止案内をはさんだ。併せて HP にもその旨掲載したが、苦い思い出である。

様々な制約がある中で、ワンチームとして様々な工夫をした。従来からあるアクションプランとしての委員会を増設して副会長を委員長として活動を開始。担当委員会の努力で初めてリモート対応を図りハイブリッド（リアルとリモート）新年会・総会を開催。リモートは幹事会、役員会や幹部会でも活躍することになる。

会報では、記事の重要なソースである同期会や同級会が軒並み中止となり、新任の編集長も苦勞していた。そのため、班活 OB・OG 会などの活動や関連団体の情報をシリーズとして掲載することとした。また、コスト面などから会報のウェブ化の検討も進め、試行をスタートしている。会報と共に大きな情報提供手段のホームページも、素早い情報提供を心がけ、新しい企画を掲載。同窓会運営にご尽力した方々の“生ヒストリー温故知新”や女性の会が 2 年続けて中止延期となり、交流エッセイとして“一期一会”の掲載も好評だった。会費の収納も従来からの課題となっていたが、選択肢を拡大するため、担当委員会で半年ほど調査研究したうえで、新たにクレジットでの支払いを可能とした。その後本部にも情報を提供し、スタートしている。本部との連携を強化するため、従来は退任した幹事長や副会長が就任していた本部理事に、幹事長を退任した現役副会長に就任いただき、情報共有できた。同窓会では年間百数十人から寄付をいただいて、会の運営に大いに貢献している。寄付者名は会報に掲載しているが、何らかの形で御礼の気持ちをお伝えするため、会長直筆で礼状を作成して、HP の QR コード付

きのオリジナルのメモ帳を同封してお送りした。マンスリーの嬉しい作業であった。メモ帳は仕事で世話になっている印刷会社に交渉し、安く調達。何人かの会員からお礼があったことには驚くとともに、恐縮した。

40年前に関東同窓会設立時の会則は、その後20年前に改訂されたままになっているが、時代に合致するよう臨時幹事会まで開催し、充分検討して約1年がかりで改正。設立時の趣旨を尊重しながら、会の運営や決定プロセスが現在のニーズにマッチ出来たと自負している。

コロナ明けの就任最後の総会で、念願の母校吹奏楽班を苦心しながらも招聘して演奏会を実施出来て好評だったことは強く心に残っている。動画をHPに掲載してアクセス数が急増したことは大きな波及効果となった。

これらの改革は、関係者全員の協力で同窓会の発展と会員の満足度向上に貢献したと思っている。今後も関東同窓会の成功と発展を願う。

令和5年10月 記